



Data

監督、脚本：デニズ・ガムゼ・エル
 ギュヴェン

音楽：ニック・ケイヴ&ウォーレン・エリス

出演：ハル・ベリー/ダニエル・クレイグ/ラマー・ジョンソン/カーラン・ウォーカー/レイチェル・ヒルソン

👁️👁️ みどころ

映画から学ぶ歴史的事実は多いが、1992年の“LA暴動”とその引き金になったロドニー・キング事件、ラターシャー・ハーリンズ射殺事件を、あなたは知ってる？キング牧師が主導した“マーサーキングの行進”は『グロリーー—明日への行進—』（14年）で学ぶことができるが、本作ではサウスセントラルに住む“肝っ玉かあさん”の視点から、それを考えたい。

『LBJ ケネディの意志を継いだ男』（16年）で見たような、JFKとその後を継いだLBJ（ジョンソン）による“公民権法制定”にもかかわらず、黒人差別は歴然！そのため、マイケル・ムーア監督の『華氏119』の鑑賞と、去る11月2日に投開票された米国中間選挙の分析が不可欠だが、ああ難しい・・・。とりあえず“LA暴動”だけは、『マイサンシャイン』という視点からしっかりと！

■□■トルコ生まれの若手女性監督と2大スターが、なぜ？■□■

『チョコレート』（01年）（『シネマ2』43頁）で第74回アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞した女優ハル・ベリーと、『007』シリーズで4度もジェームスボンド役を演じたダニエル・クレイグは、ともにハリウッドを代表する大スター。すると、その出演料はHow much？また、そんな2大スターが共演する映画はどの系列の映画館で拡大ロードショー？そう思っていると、本作が公開されるのはいわゆるシネコンではなく、ミニシアターだったからビックリ！さらに、監督・脚本は、デニズ・ガムゼ・エルギュヴェンだが、あなたはその名前を知ってる？それを知っている人は、かなりの映画通だ。

彼女は『裸足の季節』（15年）（『シネマ38』215頁）で長編デビューした、1978年にトルコで生まれた女性。そのデビュー作はカンヌ国際映画祭パルムドール受賞作『ディーパンの戦い』

(15年)『シネマ37』126頁)などの並みいる強豪を押しつけてアカデミー賞フランス代表に選ばれ、同外国語映画賞にノミネートされるという快挙を成し遂げたが、成果はそれだけ。そんなデニズ・ガムゼ・エルギュヴェン監督がフランス国立映画学校(FEMIS)卒業後から長期にわたって温めていた企画とはいえ、本作は彼女の2作目の監督作品だ。なぜそんなトルコ生まれの若手女性監督の作品にハリウッドの男女2大スターが共演したの?多分製作費も抑えられているだろうから、2人の出演料もかなり値切られたはずだが、それでも本作に出演したのは、きっと監督や作品に魅力があったからだろう。しかし、原題を『KINGS』、邦題を『マイ・サンシャイン』とした本作のテーマは?舞台は?

■□■LAのサウスセントラル地区とは?■□■

2018年11月2日に投票されたアメリカの“中間選挙”では、下院は民主党の勝ち、上院は共和党の勝ち、と出たが、その評価は?またトランプ政権1期目の後半2年間の運営は?そして、2年後の2020年11月の大統領選挙は?ひょっとして民主党の対立候補がオバマ前大統領の夫人であるミシェル・オバマになる可能性も含めて波乱含みだ。

アメリカの人口は約2億人だが、“黒人問題”は依然として深刻だし、多民族国家だから移民問題も難しい。また、国土が広い上、州ごとの歴史や風土も違うから、今なお“南北戦争”の遺物が残っている感もある。もっともロサンゼルスやニューヨークは誰でも知っている金融国際都市でアメリカの中心地だが、本作の舞台にされたLAのサウスセントラル地区とは?

『裸足の季節』は、女性差別が強いトルコにおける10代の5人姉妹のみずみずしい生きざまと“大脱走”ぶりが面白かった。それに対して、LAのサウスセントラル地区で黒人の“子供たち”の面倒をみている“肝っ玉かあさん”風の女性ミリー(ハル・ベリー)の姿を見てみると、このおばさんは一体何人の子持ち?と考えてしまう。しかし、それは誤解で、ミリーは家族と一緒に暮らせない黒人の子供達を善意で引き取り、保護しているホスト・マザーだ。本作導入部では、母親が逮捕されて、帰る家を失った少年ウィリアム(カーラン・ウォーカー)を家に連れて帰るミリーの姿が描かれる。また、兄弟の面倒を見ている真面目な長男ジェシー(ラマー・ジョンソン)の学校の同級生で、ジェシーがほのかに恋心を抱いている同級生の女の子ニコル(レイチェル・ヒルソン)も家を失いさまよっていたため、結局ミリーが世話をすることに……。

サウスセントラル地区はそんな黒人が生活している町らしいが、もちろん白人も住んでいる。白人の中年男、オビー(ダニエル・クレイグ)がどんな仕事に就き、どんな家庭生活を送っているのかは全く明らかにされないが、ミリーの隣人であるオビーにとっては、そんな子供ばかり抱え込んだミリーの生活は騒音の巢で迷惑千万。したがって、この2人の口論は絶えなかったが……。

■□■LA暴動とは?その発端になった2つの事件は?■□■

私の持論の1つが“映画は勉強”というもの。さまざまな歴史上の事実については、学校の授業で退屈な講義を聞くよりも、暗い劇場の座席に一人で座り、じっとスクリーンを観ている方がよほど勉強になることが多い。しかし、本作のテーマとして描かれているLA暴動とは?また、その引き金となったロドニー・キング事件とは?ラターシャ・ハーリンズ射殺事件とは?

①ロドニー・キング事件は、1991年3月3日に起きた26歳のアフリカ系アメリカ人ロドニー・キングが、スピード違反でLA市警から追跡された末、警察官数人に殴打された事件。一般市民がその様子を偶然撮影した暴行映像は、世界中を駆け巡った。②続いて、同年3月16日に起きたラターシャ・ハーリンズ射殺事件は、15歳のアフリカ系アメリカ人の少女ラターシャ・ハーリンズが、サウスセントラルの食料品店の韓国系女店主トゥ・スンジャによって殺害された事件。少女は、口論の末、店を出ようとしたところを、背後から頭部を射殺されたが、その犯行は店の監視カメラが捉えていた。そして、③LA暴動とは、1992年4月29日にLA市警4人が無罪釈放されたことに怒った黒人たちが、LAサウスセントラルで起こした大暴動のことだ。その互いの関連性や流れについては各自しっかり勉強してもらいたい。

ちなみに、もう一人のキングであるマーティン・ルーサー・キング・ジュニア通称キング牧師については、『グローリー ー明日への行進ー』（14年）（『シネマ36』162頁）が、マーサーキングの行進の意義を真正面から描いているので、是非それも鑑賞してもらいたい。なお、本作ではこれらの事件については実際のニュース映像を使用しているそうだが、私が大きな衝撃を受けた映画『マルコムX』（92年）でも、冒頭にマルコムXの実際の演説と共に、暴行を受けるロドニー・キングの映像が挿入されていた。それを見ると、これが民主主義国アメリカの姿？誰もがそう思うはずだが・・・。

■□■事実を真正面から？それとも市井の人の目から？■□■

“歴史上の事実”を真正面から描いた映画は大いに勉強になるので私は大好きだが、本作が珍しいのは、LA騒動や、ロドニー・キング事件、ラターシャ・ハーリンズ射殺事件を真正面から描くのではなく、サウスセントラル地区に住む“肝っ玉かあさん”であるミリーを主人公にしてそれを描いたことだ。

ロドニー・キング事件、ラターシャ・ハーリンズ射殺事件のニュースは連日TVで伝えられていたが、子供たちの世話で忙しいミリーにとっては所詮他人事。ところが、一方でニコールをめぐるウィリアムとジェシーの恋模様の争いが生じ、他方で暴動に参加しようとする血の気が多いウィリアムを冷静なジェシーが止めようとする・・・？また、LA暴動は暴徒化した市民が韓国系店を中心に商店を襲い、放火や略奪をすることから始まったから、それを見たミリー家の子どもたちが、小さな子供だけを家に残して商店に走ったのは当然。それを知ったミリーは、オビーにも協力してもらいながら、何とかそれを止めようとしたが、逆に2人とも大混乱の中で警察官から手錠をかけられ、自由を奪われてしまうことに。

本作はもちろんLA騒動そのものの映像も見せてくれるが、それ以上に手錠で街灯にくくりつけられた二人がいかにもしてそこから脱出するか多くの映像を割いている。ジャーナリストの視点では、そんな個人的なことを映像にするより、多くの記者が知りたい客観的な情報を映像で提供すべきだが、映画作家たるデニズ・ガムゼ・エルギュヴェンの視点では、そのような選択をしたわけだ。しかして、あなたはその当否をどう考える？

2018（平成30）年11月26日記